

なかむらく れきし たず

中村区の歴史を訪ねて

なかむらくこうえん

かつぱき

が

さいがいへん

中村公園 河童聞き書き (災害編)

中村図書館では、「鸚鵡籠中記」おうむろうちゅうぎなどの記録をもとに、中村公園に棲む河童が、江戸時代の中村区近辺の出来事を語る『中村公園 河童聞き書き』を作成しました。のんびりと河童の昔語りに耳を傾けながら、当時の様子を思い浮かべてください。(水害の記事を中心に抜粋しました。)

なかむらくこうえん

かつぱき

が

【中村公園 河童聞き書き】

なかむらくこうえんちゅうしやじょう

なか

かつぱれいくようひ

ぞんじ

だれ

た

中村公園駐車場の中に河童霊供養碑があるのをご存知かな。誰がいつ建ててくれたの

ふめい

なかむらく

みな

かつぱ

たいせつ

たし

かは不明じやが、中村区の皆さんがわれわれ河童のことを大切にしてくれておるのは確

おんがえ

し

なかむらく

えどじだい

できごと

かじや。その恩返しに、わしの知っておる中村区あたりの江戸時代の出来事をこれから

き

むかし

きおくちが

さいり

お聞かせしよう。なんせ昔のことで記憶違いがあるかともしれんがどうか最後までお

つきあ

付き合ってください。

わしが覚えておる最初の出来事は、枇杷島に橋が架けられた事じゃ。元和八年（一六二二年）十二月二十八日だから、今から四百年くらい前のことじゃ。橋の長さは百十間（約二百メートル）、橋守の役人二人が置かれたんじゃ。役人は広さ一反四畝二十六歩の田を貰っておったんじゃ。四百五十坪ほどの広さじゃ。

寛永六年（一六二九年）五月十五日、せつかく架けた枇杷島の橋が、洪水で流されたんじゃ。自然に比べると、人のすることなどちっぽけなものじゃ。

元禄七年（一六九四年）八月三日、枇杷島で水位が五合となったんじゃ。今も川には水位計があるが、江戸時代にも同じようなものがあつたんじゃ。まあわしのような河童ならそれこそ屁の河童の水位じゃ。

げんろく
元禄十四年（一七〇一年）八月九日から雨が降り続き、特に十七日の夜九ツ（午前〇時）から十八日の朝四ツ（午前十時）までは雨・風とも激しく、枇杷島の水位が七合となつたんじや。ニツ杵・法界門では堤防が崩れ、田畑と道の区別がつかないくらい水に浸かってしまったじや。枇杷島川には家が四軒も流されてきたんじや。どこかのニュースで見たことのあるような場面じや。

めいわ
明和四年（一七六七年）七月十二日、大雨で領内では多くの堤防が崩れ、田畑の被害はすつひやくちよう
数百町（三十万坪以上）、溺れ死んだ人は二千人にもなつたんじや。

あんえい
安永八年（一七七九年）七月二十三日、朝から大変な暴風雨で、高須賀では家四軒が倒れ、下中村の東では家五軒が吹き倒されたんじや。七月二十四日、枇杷島の水位が一升になつたんじや。一升ならばもう満水じや。七月二十九日、小田井の堤防に見廻りに行つたんじやが、家が流れ着き、それが壊れてまるでゴミのように岸に寄せられておつた

んじや。稲葉地村では西の堤防が崩れそうだと知らせる声があるので、老人子供は堤防
いなばじむら にし ていぼう くず ろうじんこども ていぼう
 の上、残りの者は岩塚の方へ避難したところ、その隙に泥棒が二軒の家に入ったんじや
のこ いわつか ほう ひなん すき だろぼう にけん いえ はい
 。泥棒は「堤防が崩れるぞ」と叫んで騒ぎを起こし、その間に盗みを働いたんじや。
だろぼう ていぼう くず さけ さわ お あいだ ぬす はたら
 田へは家が流されて来ておったんじや。悪党どもはこの家も壊して衣類を始めいろんな
た いえ なが き あくとつ いえ こわ いるい はじ
 道具を盗み出したんじや。人の不幸に付け込むとは信じられないくらいの悪人じや。
どうぐ ぬす だ ひと ふこう つ こ しん あくにん
 九月九日、殿様が枇杷島中嶋法華塔の前で水害にあった人々に、にぎりめしを施すよ
めいれい とのさま びわじまなかしまほつけとう まえ すいがい ひとびと ほどし
 う命令されたんじや。役人どもの対応が遅いと怒っておられたんじや。尾張の殿様は
りようみんおも かくた やくにん たいおう おそ おこ おわり とのさま
 領民思いのよいお方じや。

文政五年（一八二二年）九月、先月から枇杷島大橋が架け替え工事の最中じや。十一
ぶんせい せんげつ びわじまおおはし か か こうじ さいちゆう
 月十六日、枇杷島橋の工事が終わり、巳刻（午前九時）に渡り始めの式が行われたん
びわじまはし こうじ お みこく ごぜんくじ わた はじ しき おこな
 じや。

【参考資料】

『中村公園 河童聞き書き』

名古屋市中村図書館

2016